

Title	<Book Review>Chalao Chaiyaratana, Let's Speak Thai, Bangkok : The Social Science Association Press of Thailand, 1965,188p
Author(s)	桂, 満希郎
Citation	東南アジア研究 (1966), 4(1): 177-178
Issue Date	1966-06
URL	http://hdl.handle.net/2433/55191
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

マ6世を多面的な人間と捉え、王の多面性を疎漏なく捉えようと努力したことが、幸いしているように思われる。更に本書は、当時生じたいくつかの重要な歴史的な事象を明確に解き明かしている点で、貴重な文献になっている。タイの王朝で、はじめて外国留学の経験をもった国王であり、しかもその留学期における王の socialization が、タイ政治史の上で一つの重要な転変の契機となっているだけに、本書の冒頭の留学についての叙述は、たいへん参考になる。そのほか、1912年に生じたいわゆる「ラタナコーシン歴130年の革命」についての記述は、その革命が、たとえ失敗したとはいえ、タイの絶対王制にたいする近代官僚の最初の革命的反逆であっただけに、貴重なデータを提供してくれているし、また有名な「スアパー義勇隊」について、国王がどういう考えをもっていたかも、本書でよく示されている。

ラーマ6世にたいする著者の態度は、タイトル——「哲人王」を意味する——が示すようにたいへん好意的である。ラーマ6世の御代は、本書においては、チャクリ王朝史の黄金時代と捉えられている。ラーマ6世が犯したさまざまな失政は、本書ではかならずしもはっきりしない。その点は、Chula Chakrabongsらの英語文献、あるいは Thai Noi らによるタイ語の伝記によって補足する必要があるだろう。それにも拘らず、本書は、現段階におけるラーマ6世の研究としては、最先端を切るものであり、内容の水準も高度であるからには、見逃せない一書であると断じうる。巻末にまとめられた参考文献目録は有益だし、そして、本書は、巻末に索引を備えている点で、タイの本としては、稀有の範疇に属するといえる。（矢野 暢）

Chalao Chaiyaratana. *Let's Speak Thai*. Bangkok: The Social Science Association Press of Thailand, 1965. 188p.

本書は、タイ人の言語学者によって書かれた、外国人（主として英語を母国語とする）のための、タイ語入門書である。題名から察せられる様に、実用一点ばりの練習用の書物であるが、その基礎は、現代アメリカの構造言語学にもとづいて作られた、まじめな本である。タイ語について、タイ人の言語学者によって書かれた実用的な練習用の本では、本書が最初のもので

はないかと思う。

著者は、MITにおいてApplied LinguisticsでPh.D.を取り、現在タマサート大学教養学部言語学科のHeadをつとめると同時に、自身のChalao Language Instituteにおいても、活ばつに言語教育を進めている。タイ国における、この分野での代表的人物と言えるだろう。本書の他にも、タイ人のための英語のテキスト類やレコードなど、数多く出版している。タマサート大学では、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、日本語が教えられているが、どの授業も著者流のIntensive Methodでつらぬかれている様である。

本書の全部が文型及び句構造の練習より成る。全体で32の文型を設定し、その各々を一つのChapterとして多数の例をあげて練習に供すると同時に、句構造として、Noun PhrasesとVerb Phrasesとを説明し、その各々の型につき練習用の例をあげる。これらの文型及び句構造を一見すると、本書はTransformational Analysisの理論を基礎としていることがわかる。Noam Chomskyを中心としてアメリカで展開されたTransformationの理論は、色々な面でその有用性を発揮しているが、これはその理論がタイ語に応用された好例であろう。なお、本書では、タイ文字はいっさい使用せず、すべてローマ字による音素表記が用いられており、根本的にはMary HaasのSpoken Thaiの表記法と同じものとみてよい。

本書は、もともと、教室で使用するTextとして作られたもので、独習用のものではないから、別にこんな切ていねいな説明というものはない。したがって、本書でタイ語を学習する際には、少くとも最初の一定期間は、適当なタイ人について勉強する必要があるだろう。ただ、最初のコツを得てしまえば、あとは何も考えずに自分でどんどん進むことが出来るだろう。本書を完全に仕上げれば、一応のSpeakingには不自由しないと思う。最後に、問題に思う点は、これをTextに使用した場合、習う方の者に相当な忍耐力がなければ、最後まで続かず落伍する者が多く出るのではないかということである。全体が文型という文法的なPatternのみにもとづいて配列されているため、各文の内容の間には何のつながりもなく、ただ同じPatternに属する多くの文を次々と練習して行くのであるから、どうしても、「アキが来る」きらいがあるだろう。私は、むしろ、本書は教師用の整理ノートの様なものと

して使用し、実際に教室で使用するには、もう少し形のちがった、内容的にも興味の持てるものにした方がよいと思う。あるいは、*Spoken Thai* などで一応基礎的なタイ語をやった者が整理のために本書を使用するのなら、大いに有用であろう。なお、かなり誤植が多く、急いで製本した様な印象を受ける。(桂満希郎)

David D. Thomas et al. *Mon-Khmer Studies I*. Saigon: 1964. 163p.

Linguistic Circle of Saigon といっても一般には知られていないが、本書によると、南ベトナムの Saigon 大学と米国の Summer Institute of Linguistics のメンバーによる研究会であるらしい。本書は、その研究会が1963年秋にユエ (Hue) で行なわれた際に読まれた原稿をまとめた論文集である。著者は、編者として Introduction を書いている米国 North Dakota 大学の David D. Thomas を除いては、John and Elizabeth Banker, John and Carolyn Miller, Richard and Sandra Watson というこれまではほとんど無名であった人たちがばかりである。

本書で扱われている言語は、南ベトナムで話されている3つの少数民族の言語、すなわち Bahnar 語、Brou 語、Pacoh 語であって、いずれも東部モンクメル系統に属する。この系統の言語は、ラオス、ベトナム、カンボジアに様々な種類が分布しており、比較言語学的にクメル語を考えるうえで欠かせないものであるにもかかわらず、事実上ほとんど未開拓のままであった。その意味で本書の出現はまことに喜ばしいことに違いない。ことに、このうちの Brou 語と Pacoh 語は今まで単にその名が知られていただけであった。

もっとも本書からはこれら3つの言語の断片しかわからない。各論文とも記述的な研究であるが、短い論文であるうえ、取上げた問題も方法も異なっていて、全体としてひとつの言語の構造がわかるという体裁のものではないからである。すなわち、Bahnar 語については、(1) Clause Paradigm, (2) Affixation, (3) Reduplication, Brou 語については、(1) Word Classes, (2) Substantive Phrase, Pacoh 語については、(1) Pronouns, (2) Phonemes が、それぞれ述べられている。

本書の主眼とする所はむしろ様々な記述方法の適用

例の提示ということにあるようである。たとえば、Bahnar 語の Clause Paradigm には transformational battery が、Brou 語の Substantive Phrase には tagmemic approach が用いられるという具合に。しかしこの場合、battery とか tagmemic, tagmatic とかいった術語に対して、十分な説明や定義がほしいものである。これらはまだあまり熟していなかったり、学者によって用法が同じでないものだからである。

比較言語学的な論文としては Thomas によるモン・クメル語比較研究の展望があるのみであるが、まさにその中で述べられているように、この系統の言語の比較研究を困難にしている最大の原因は音素論的基礎の欠如である。それは本書の対象となっている言語についてもあてはまることである。

ともあれ、Schmidt より半世紀以上もたった今日ようやく、しかしここ数年来にわかに、モン・クメル語の研究が活発になったことは事実であって、本書もまたそのひとつの現われなのであろう。(三谷恭之)

Udom Warotamasikkhadit. *Thai Syntax: An Outline*. A Dissertation Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Texas. Bangkok: College of Education Prasarnmitr, 1963. v+70p.

タイ人によって書かれたタイ語に関する本というのは、一口に言えば、いかにして正しいタイ語を使用するかという規範的なものがほとんどであった。しかし、最近になって、タイ人の若い学者で、主としてアメリカの記述言語学の方法を身につけ、それでもってタイ語を記述説明して行こうという人達が出て来ている。本書はその代表的なものといえるであろう。したがって、本書はタイ語の規範を示すものでもないし、これでもってタイ語を勉強しようとしても全く無駄であろう。言いかえれば、「いかにタイ語を使用すべきか?」ということは一応別にして、「タイ語とはどういう構造の言語か?」ということを明らかにしようとするものである。

アメリカの構造言語学においても、従来の方法では説明し切れなかった多くの点を説明することのできる新しい言語理論として現れたのが Noam Chomsky, Emmon Back 等を中心とする Transformation の